

広報すずらん

発行日：平成25年10月1日（1995年創刊）
 発行元：社会福祉法人すずらの会 理事長 大長篤徳
 〒252-0328 神奈川県相模原市南区麻溝台7-1-7 TEL: 042-749-8881
 編集：広報委員会 ホームページ URL: <http://www.suzuran.or.jp>

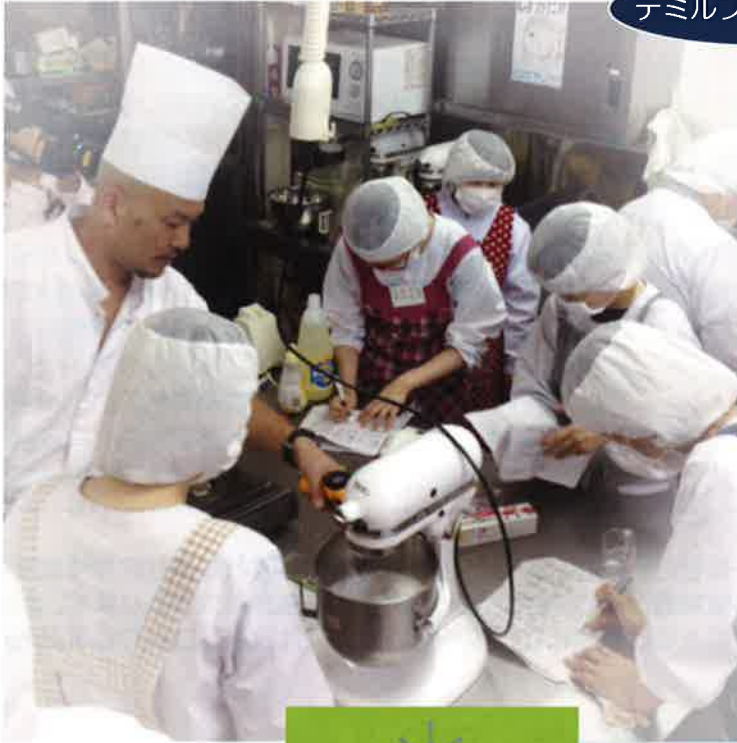
2013(平成25年)

10
第49号

月発行

テ米尔プロジェクト

プロとのコラボレーション企画



昨年10月より、すずらの家が参加したテ米尔プロジェクトとは、いろいろな分野の人が集まり、得意分野についてそれぞれの強み（知恵や技術）、力を持ち寄り、自立に向けた福祉を創造して行く企画です。このプロジェクトに協賛ご協力いただいている企業等の中から、東京代々木上原にある洋菓子店『ASTERISQUE（アステリスク）』のオーナー「和泉光一氏」にプロデュースを引き受けいただき、すずらの家で総合的な製菓指導が行われました。和泉氏は、数々の賞を受賞し、アジア、ヨーロッパ、アメリカのホテルや洋菓子店などで商品開発を手がけたプロフェッショナルです。すずらの家にも新作スイーツ3品のレシピを提供いただき、直々に約3か月間の製造指導を受けたメンバーが、新作スイーツ（マカロン・焼ドーナツ・プリン）を作り上げました。（9月より順次発売開始）

商品のパッケージを飾るのは、イラストレーター「ふじわらてるえ氏」によるデザイン画です。商品が完成するまでの間に、とてもかわいらしいイラストが出来ました。

商品はテ米尔プロジェクトの販売網から、各種の催し会場や通信販売などで購入することができます。お見かけの際はぜひご賞味下さい。（一部の商品は店舗でもご購入いただけます）

4つの彩り、カラフルマカロン。

ピスタチオを飾ったほろほろのストロベリー、スイートポテトの濃厚な味わい、ブルーベリーとチョコの組み合わせ、そしてココアと抹茶の組み合わせ。4つの色と味の違いが楽しめるマカロンです。

パティシエ：和泉光一氏

イラストレーター：ふじわらてるえ氏

懐かしいおいしき、こだわりのプリン。

こだわりのプリンには、自然の恵みと、愛情がこめられています。お砂糖の量を控えめにし、お豆腐の旨味を生かしたプリンです。お豆腐の旨味を生かしたプリンです。お砂糖の量を控えめにし、お豆腐の旨味を生かしたプリンです。

地元では『村富線』の名でお馴染みの県道507号線沿いに、パレンシアオレンジ色のテントを掲げてみなさまのご来店をお待ちしております。

焼きドーナツは、5つのフレーバー。

香ばしいおいしき「プレーン」、スライサーがサクサクと入った「キャラメル」、スライサーがサクサクと入った「アーモンド」、チョコチップがたっぷり入った「チョコ」、ほろほろの「プレーン」から、とってもヘルシーな「電子レンジで焼く」まで、みなさまにうれしいフレーバーをご用意しております。是非お試しください。

SHOP Information

焼き菓子の製造&販売 すずらの家

所在地：神奈川県相模原市南区新磯野 2-11-5

ドームビル 1F

営業日：月～金 AM9:00～PM5:00(土・日・祝日休)

連絡先：TEL：042-747-2418



1982年に地域作業所として開設したすずらの家は、8年後の1990年に製菓の製造販売を手掛けました。現在は多機能事業所として製菓部門の店舗を構え、焼き菓子を中心としたスイーツを販売しています。原材料にこだわり保存料を使用しない商品をみなさまへお届けいたします。随時ご注文をお待ちしております。

「さがみはらフキ情報」

相模原中央から相武台へ通じる県道は通称村富線と呼ばれています。由来はこの道の起点にある村富神社。この社は上矢部新田の鎮守として祀られた村富稲荷のことで、社の前に大きな松の木があり、息をしないで七周すると白い大蛇が現れるといわれています。（相模原民話伝説集より）

シリーズ特集②

社会と福祉の 間には...

この特集は、地域社会の一員として福祉施設の在り方が大いに問われており、一般社会と福祉社会にある垣根をいかにすればなくすことができるかを考えて行きます。

前号では、福祉職とは関わりの少ない方へ福祉全般に対するイメージや認知度、望む事などを聴かせてもらいました。高齢者福祉についてのご意見が多く、障害者福祉については励ましの言葉の一方で、誤解であろう表現もあり残念な部分もありました。本号では、それらの声をカテゴリー別にし、問題を整理してみました。いただいたご意見を踏まえ、あるドラマを題材に福祉の垣根について考えたいと思います。また、「インターネットを覗いたらこんな意見がありました」では、障害に対する思いを関わりのある側の気持ちとして率直に表現されています。

このTVドラマを見ていた方はいるだろうか。2004年4月より日本テレビにて放映され、母と自閉症の息子の成長の記録を綴った、「光とともに」ひとりの母親が、息子とともに、様々な壁を乗り越える過程で、自分の人生と家族というものを見つめ直し、前向きに生きることを決意していく姿を描いている。

～ストーリー～

ドラマで登場する祖母は孫の障害を正しく理解できず、嫁のしつけが悪いと責め立てていた。そんな中、一人の特殊学級の教員との出会いをきっかけに主人公「光」の学校生活が始まった。入学式の記念撮影で、光が突然カメラマンに飛び掛かった様子を目にした保護者達は不安を訴える。教員は、教室になじめずに机の下にもぐり込んでいた光のために、小さなスペースを作った。毎日来ては小さなスペースへ閉じこもる光は次第に外へと興味を持ち始めた。ある日、光が倉庫でフラフープを握りしめ倒れてしまった。この事件をきっかけに興味を外の世界へ広がっている事を知った父親が、光の事を理解しようと積極的に接するようになった。同じくその頃、校長先生の提案で、子ども同士と一緒に何かをやり遂げ、光をもっと理解してもらおうとトマト作りが始まった。初めは無関心だったクラスメイトも、光と接するようになり障害について正しく理解して行く。光の成長ぶりを聞いた祖母は、光と次第に接するようになる。学校生活や人との関わりなど様々な出来ごとを通じて光と家族・クラスメイトの間いつしか信頼が芽生えて行く...

このドラマでは、障害というものに対して、正しい理解がされていない世界で様々な出来事が起き、ストーリーが進行して行く。その中で生じる誤解や問題が描かれており、出来ごとに直面した家族や周囲の人々が、次第に自閉症という特性を理解し、環境や意識の違いからくる垣根を取り除いてゆく姿が描かれている。この様に障害そのものに接する場面がある場合、人は障害について学ぶ機会を与えられ、そのことについての意識や理解を深められるが、普段の生活の中で関わる人が少ない人にとって、障害についての理解と個々の障害特性を理解するという事はとても難しい事であると思います。誤解や偏見などの垣根をなくすには、問題を整理し、一つひとつ原因を考えて行く必要があるかも知れません。



インターネットを覗いたら こんな意見もありました。

「障害者に対してどう思いますか？」正直、自分はよく分かりません。「可哀想」と思うのは失礼だと思う。でも普通の会話とか出来ないの、どうしても距離をおいてしまいます。どう関われば良いのか分かりません。子供の通っている学校に障害のある児童さんもいるようで、どう子供へ伝えたらよいのか分かりません。障害のある方に対して、どの様に思えばよいのですか？どう対処すれば良いのですか？

既読者からの回答

正解なんてないかなって思えます。距離を置くことが、あなたの本当のお気持ちだとしたら、それはそれでよいのではないかと思います。お子さんに伝える時は、障害を持っている人だと話せばよいと思います。学校で見ていると、お子さん方もそれなりに分かると思います。ちなみに、私の姪は知的障害者です。就職もでき明るく毎日仕事に行っています。本人は不幸なんて全く思っていないし、私も一度も思ったことはありません。それよりも、周りの家族が可哀相とってしまうことはあります。やはり育てていくのは本当に大変なのでね。私は姪とよく遊びますが、障害者という意識は殆ど感じません。もちろん、周りの人の視線を感じることはあります。偏見を持たれている人も正直いますが、それは仕方ないことだと思います。社会がいくら障害者を受け入れるようにしたとしても、そういう人がなくなるわけではありませんしね。ただ、姪に限らず障害者に接していると、不思議と心温まります。私は逆に、とても大切な気持ちを彼らから与えてもらっているような感覚になることが多々あります。純粋なんですよ、だから、心が澄み渡るのです。一緒に話をしていると通じないこともあるし、疲れることもあります。面白い行動をした時は笑っちゃうこともありますね。

前号の回答から下記にまとめた一覧表を見て行くと、福祉と一般社会の垣根を作っている要因として社会を構成する環境が原因であることがわかりました。現代社会では、建築などのハード面のバリアフリー化が進み、身体に障害のある方でも健常者と同じ生活が出来るように改善されつつあります。しかし、ソフト面でのバリアフリー化については、まだまだ世間一般の方々に浸透していない現実があり、まさしくこれからの課題であると思います。そのために我々社会福祉に携わる者たちがどのように垣根（ギャップ）を外せるか？前号でも記載した通り、斬新な視点が必要ではないかと感じます。

※福祉全般について約80名の方からご意見をいただき、類似する内容に関しては要約しております。

無関心	関わり方が分からない	悪いイメージ	良いイメージ	期待	要望
<ul style="list-style-type: none"> 深く考えた事がない、身近に感じない、実感がわかない、福祉の事を知らない分からない等、福祉について関心が無い回答。 福祉施設がどんなことをしているの分からない、福祉イコール幸せと聞いたことがあるが、いまひとつピンとこない、など具体的に興味を持つ事に至らない回答。 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションの取り方が分からない、不用意に関わる事に気を使ってしまう、どのように関わるのか分からないなどの接し方について分からないとの意見。 突拍子のない行動から偏見を抱いてしまうなどの意見。 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉職員の労働環境や条件などに関する良くないイメージ。 へだたりから生じる不安や不信感などの意見。 	<ul style="list-style-type: none"> 一生懸命に頑張っている、縁の下での力持ち、偉いなぁと思うなど、励ましの意見。 助け合い、手助け、今後の日本を支える大切な分野、大事に考えなければいけないものなどの福祉そのものに対する関心を伺える意見。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域のコミュニティになって情報発信を行ってほしいという意見。 高齢者や障害児者、その家族を含めたサポートの充実を望む意見。 閉鎖的な印象なため開放的であってほしいとの意見。 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉サービスの向上により、より良い生活を送れるようになってほしいとの意見。 支援をする側、される側ともに、気持ちよく利用をすることが出来る仕組み作りをしてほしいとの意見。

報道

教育

福祉

制度

「垣根」をなくすには、社会を構成する環境の上記4項目を一つひとつ変えて行く必要があるのではないのでしょうか？

福祉の取り組みや、報道による世間の認識、制度・教育の問題点など・・・

次号では福祉についての歴史から、我々支援側が出来る事を考えて行こうと思います。

「新しい障害者制度に変わって」

理事長 大長 義信

25年度は早くも半期が過ぎ、後期に入りました。今年度は制度が障害者自立支援法から障害者総合支援法に変わった初年度になりますが、事業運営上はさしたる変わり無く推移して来ました。障害のある人達が毎日どの様な割合で施設を利用して来たかによって施設収入が決まる今の制度下では、利用率の如何が事業運営の厳しさを左右する大きな要因になっています。今に始まった事ではないとは云え、法人傘下の事業所の多くはこの半年の間大変な苦勞をして来ました。特に就労を支援している事業所では、障害のある人達と職員が一緒になって就労に向けて努力し、それが実を結び就労と云う目標を達成した途端に事業所としては定員割れを起こして事業費収入が減り運営に支障を来すようになると云う制度上の矛盾と直面し続けています。グループホームや児童デイサービス事業も同じような問題を抱えています。結局は今迄の障害者制度は障害者の権利擁護や福祉ニーズへの対応には十分な目配りをして来たとは云っても、良質なサービスを継続的に提供しなければならない施設の経営にはあまり目を向けて来なかったという事が云えるのではないのでしょうか。昨年末の政権交代の後、デフレからの脱却が叫ばれ円安に大きく切り替わった事を受けて、企業業績が改善された事例が目につくようになりました。やがて雇用も改善され国民の懐事情も好転してくるに違いありません。これが障害者の働く場にまで及んでくるのはいつになるのでしょうか。間違いなく云えるのは、黙って待っているだけでは障害者施設の就労事情が好転する事は無いだろうと云う事なのです。利用者への支援と平行して慣れない営業活動に力を入れ理解のある大手企業を開拓して行かない限り、今迄の枠から抜け出すのは容易なことではありません。



書道教室の様子

「ボランティア交流会」

6月29日(土)第4回目となるボランティア交流会が開催されました。日頃から土曜日の余暇支援活動にご協力いただいている講師とボランティアの方々、余暇支援事務局を合わせて総勢30名余りの参加となり、余暇支援委員長からは『今回は初めての試みとして、各余暇活動の様子について写真を用いて解説し、初めて交流会に参加された方には、活動内容が分かりやすいと好評でした。また、災害時の対応や危機管理について再度確認をいたしました。講師やボランティアの方々からは、交流会の定期的開催を喜び声が多く聞かれ、より良い余暇支援にする為にも、ここで頂いたご意見やアンケート結果を、今後の余暇支援に活かして行きたいと思っています。』との話がありました。

給食室から **こんにちわ** —身近な栄養学—

栄養士 岩淵 智子

今よりも10分長く動く、それが健康維持の第一歩!

～新しい身体活動基準・身体活動指針2013～

「身体活動」は、食事の大切さとともに健康づくりに欠かせないものです。成人から高齢者を対象に、より多くの人に新しい身体活動基準・身体活動指針が示されています。生活習慣病のみならず、運動器の障害や認知症など、より幅広い疾患の予防をすすめるものです。

● 新しい身体活動基準

年齢	1日当たりの身体活動の時間	1週間当たりの身体活動量
18～64歳	毎日、歩行または同等以上の強度で 60分以上 体を動かす。	23メッツ・時/週
65歳以上	毎日、どんな動きでもいから、 40分以上 体を動かす。	10メッツ・時/週

- 筋力トレーニングやスポーツなどの運動が1週間当たり60分以上含まれると、なお効果的です。
- 18歳未満については、身体活動が生活習慣病などのリスクを低減する効果について十分なエビデンスがないため、基準の設定はありません。
- *23メッツ・時/週…約30メッツの強度で1日約1時間の身体活動を1週間続ける。
- *10メッツ・時/週…約2.2メッツの強度で1日約40分の身体活動を1週間続ける。

メッツって何?

○身体活動の強度(体の動きの速さ)の単位。

動かすにしている(10メッツ)
 普通歩行・犬の散歩(3.0メッツ)
 静観(1.3メッツ)
 子ども遊ぶ(1.5メッツ)
 自転車に乗る(4.0メッツ)
 早歩き(4.3メッツ)
 階段をのぼる(8.0メッツ) など

● 新しい身体活動指針「プラス10!」

いつもより10分! 動く時間を増やしましょう。

生活習慣病の心配がなくても、それだけで健康とはいえません。身体活動や運動が不足すると、将来的に運動器の障害や認知症のリスクが増える可能性があります。身体活動を増やすことは、生活習慣病をはじめ、認知症や運動器障害のリスクを下げる事が認められています。「きついと感じない程度に身体を動かす」ことを、毎日の習慣にしていきましょう。

運動の行き帰りやショッピングをするだけで、ゆうゆうウツリ!

● 10分歩くこと...

歩数は ▶ 約1,000歩
*「歩きやすさ、ちょっと歩く」などの歩数も含まない。

消費エネルギー量は

▶ 約35kcal
(体重70kgの場合)

3メッツ × 10
 60 × 70kg = 35kcal

1年続けると、約10,000kcalの消費エネルギーに!

地域交流イベントのお知らせ

★フェスタすずらん

平成25年10月26日(土) 10:00～15:00
 会場: グリーンハウス

★Pure Heart 作品展

平成25年11月8日(金)～11月14日(木)
 会場: 相模原市 市民健康文化センター

★クリスマスコンサート

平成25年12月14日(土)
 会場: 相模原市 市民健康文化センター



ご寄付を頂きました

有限会社 郷司商店 様

住友スリーエム労働組合
 相模原支部 様

兒玉 秀雄 様

この場を借りて
 感謝申し上げます。



編集後記

(特集記事) 前回の取材から得た情報を分析して行くと、障害のある人のご家族・福祉職員・福祉に関わりが少ない方の中には、考え方に大きなギャップがあることがわかりました。今回、記事を構成するにあたり、垣根(ギャップ)を無くす事を念頭に編集を行いました。表現の難しさを実感しております。